

# TRANS

『『翻訳』の諸相』研究会 Newsletter No.11

2004/11/10

活動状況 (研究会、フォーラムの詳しい報告と発表要旨を、本号に掲載しています。)

◆ 第二研究班の第 6 回研究会「物語論からオリエンタリズムへ」(「帝国システムの政治・文化的比較研究」グループと共催)が、以下のように開かれました。(出席者 40 名)

日 時： 2004 年 10 月 9 日 (土) 午前 10 時より午後 1 時まで

場 所： 京都大学文学部新館 第 4 講義室

発 表： 1. 北村直子 (文学研究科博士課程) 「認識の方法としての物語」  
2. 吉田 城 (文学研究科) 「19 世紀オリエンタリズム文学——テオフィル・ゴーチエ」  
3. 杉本淑彦 (文学研究科) 「オリエントを見る眼差し：ヴィヴァン・ドノン『ボナパルト将軍  
麾下の上下エジプト紀行』

◆ 第一研究班の第 11 回研究会が、以下のように開かれました。

日 時： 2004 年 9 月 25 日 (土) 午後 1 時より

場 所： 京大会館 103 号室

報 告： 秋草俊一郎 (東京大学大学院) 「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 3 歌第 36 連から第 4 歌第 31  
連まで」

コメンテーター： 小西昌隆 (早稲田大学)

参加者： 秋草俊一郎、芦本 滋、柿沼伸明、小西昌隆、鈴木 聡、中田晶子、皆尾麻弥、若島 正 (以  
上 8 名)

初めての報告となった秋草さんは、修士 1 年とは思えないほどの準備と発表ぶりでした。今後の活躍が大いに期待されます。

◆ 第二研究班の第 3 回フォーラム «*La critique au début du XXe siècle*» 「フランス 20 世紀初頭の批評」(使用言語：フランス語)が、以下のように開かれました。(出席者 30 名)

日 時： 2004 年 9 月 25 日 (土) 午後 2 時より 6 時まで

場 所： 京都大学文学部新館 第 2 演習室

発 表： 1. 吉田 城 (文学研究科) «*La jeune NRF et son refus d'*A la recherche du temps perdu**»  
2. 小黒昌文 (文学研究科博士課程・学術振興会特別研究員) «*Contre la renaissance classique:  
l'arrière-plan critique des fragments proustiens sur Nerval*»

特別講演： ウィリアム・マルクス (パリ第 8 大学) «*Les deux modernisms: France / Angleterre.  
T. S. Eliot et la NRF*»

司 会： 永盛克也 (文学研究科)

(小黒昌文・吉田城 作成)

1. « Contre la renaissance classique : l'arrière-plan critique des fragments proustiens sur Nerval »

ジェラルム・ド・ネルヴァル (1808-1855) がマルセル・ブルースト (1871-1922) の小説美学に与えた影響に関しては、これまでも数多くの研究がなされてきた。しかし、ブルーストが1908年から1909年にかけて書き付けた『シルヴィ』に関する批評断章を、同時代の文学批評の流れのなかに位置づける試みはほとんど行なわれてこなかったと言ってよいだろう。本発表は、『サント＝ブーヴに反論する』に収録された件のネルヴァル断章を再読し、そこに「古典復興」 *renaissance classique* と呼ばれる同時代の重要な文学的動向が残した痕跡を積極的に読み取ってゆくことを目的としている。

古典主義的・伝統主義的な価値観への回帰を強く主張した「古典復興」という傾向は、当時の主要なトボスを成していながら、過去へ遡ろうとするその特性ゆえに他の前衛的な動向と比べて軽視され、文学史では取り上げられることがほとんどなかった。しかし、同時代人であるブルーストがこの動向に無関心であったはずはなく、ネルヴァル (とりわけ『シルヴィ』) をめぐって当時の批評家が展開した伝統主義的な解釈に対する作家の反発がそのことをはっきりと物語っている。換言するならば、「古典復興」の大きな流れが生んだネルヴァルに対する「誤った評価」が、批評行為と文学創造に関する思索を深めるきっかけをブルーストに与えたのだと考えることもできるだろう。

さらに興味深いのは「フランス語の顕揚と擁護」を唱える新古典的な流れ (ブルーストはネルヴァル断章でこれを批判する) が、文体とフランス語の伝統との関わりをめぐる考察へとブルーストを導いているという点であろう。こうした姿勢は、古代および古典主義を範とする「ロマーヌ派」を創設したジャン・モレアスという詩人に対して、作家がその晩年に至るまで一貫して否定的な態度を貫いたという事実にも表れている。これは「古典復興」の議論の射程が、世紀転換期から第一次世界大戦後にまで広がっていることを示しているという点でも、きわめて重要な問題であるはずだ。

(小黒 昌文)

2. « La jeune NRF et le refus d'À la recherche du temps perdu »

NRF (「新フランス評論」) は新しい文学の可能性を夢見て集まった新世代の青年たち、アンドレ・ジッド、ジャック・コポー、ガストン・ガリマール、ジャン・シュランベルジェらが形成していた。伝統的なブルジョワ文学を忌避し、かといって当時台頭していたダダ・シュルレアリスムとも一線を画して、感性で古典を刷新しようとする集団だった。1912年、「スワン家の方へ」の出版をめざして奔走していたブルーストは、本心からNRFに期待をつないでいた。しかし同年12月彼のもとに原稿 (タイプ原稿) が送り返されてきた。

この「拒否事件」はのちにジッドが自分の生涯の最大の過ちであった、という手紙をブルーストに出したことから、世に注目され、その本当の原因をめぐってさまざまな議論が戦わされた。原稿の梱包そのものが開封されなかったという説から、ジッド一人ではなく責任は全員にあるという折衷的解釈まで、多様な意見が出された。ごく最近になって、パスカル・メルシエがシュランベルジェの日記を出版し、そのなかに査読を彼が任されて、一週間で否定的結論に至ったと記されているのを発見した。

しかしこの説も、私見に依れば疑わしい。この一週間のあいだ、シュランベルジェは外出が多く、観劇もあり、とてもあの推敲で真っ黒になった分厚いタイプ原稿を読み通せたはずはないからである。シュランベルジェも、他の人も、本気になって「社交作家」「長文作家」ブルーストの原稿を読まなかったという方が正しいのではないか。この点で、ジッドを驚かせた「レオニー叔母の椎骨」に関するコルブをはじめとする解釈も、説得力に欠けるものといわざるを得ない。

(吉田 城)

### 3. « Deux modernismes : France / Angleterre. T. S. Eliot et la NRF »

イギリスとフランスという二つの文化圏において、モダニズムという概念がもつコンテクションに大きな相違があり、それが結果としてこの概念を至極曖昧なものにしていることは注目に値する。本発表では、本来は同義と考えられる《classique》、《tradition》、《canon》という語が、互いに相容れない美学的主張に結びつくことを指摘し、フランスの文化を「古典の文化」《culture à classiques》、イギリスの文化を「伝統と規範の文化」《culture à tradition et à canon》と捉えた上で、各々の土壌に芽吹くモダニズムの本質的な相違についての検証を行なった。

『クライティリオン』と『新フランス評論』（以下、*NRF*と表記）という、英仏モダニズムを象徴する文芸雑誌に関わったT. S. エリオット（1888-1965）の立ち位置は、この問題を考察する上で重要な指標となる。詩人として革新的な作品を生み出すいっぽうで、伝統に準拠することの重要性を訴えもした批評家エリオットは、英国文学関連の時評を*NRF*に寄稿する。そこにあらわされたエリオットにとっての古典主義が、アルベール・チボーデやジャック・リヴィエールらが*NRF*で論じた古典主義とは全く異なる意味合いを帯びているという事実はきわめて示唆的である。フランス的な古典とイギリス的な規範との相違として捉え直すことのできるこの対比は、批評に関しては革新的でありながら、創作の領域では新しいものを受け入れようとしなかった*NRF*の二面性を明らかにすることにくわえ、モダニズムをめぐる英仏の差異に光を当てる一助ともなるはずだ。

フランスのモダニズムが過去との絆を全て断ち切ることを出発点としているのに対して、イギリスにおけるそれは、過去との連続性を意識し、過去の遺産のなかから必要に応じた選択を行うことで規範を絶えず書き換えることをその本質とする。変化を拒み、静止した状態を常とする「古典の文化」に芽生える前者が反古典主義的*anticlassique*とのみ規定されるのに対して、流動的で柔軟な「伝統の文化」のうちに花開く後者は、それ自体が伝統的かつ規範的*traditionnel et canonique*だということもできるのである。

（ウィリアム・マルクス）

#### 研究会の発表要旨

##### 1. 「認識の方法としての物語」

本発表では、「物語」を認識の方法として論じたヘイドン・ホワイト、ポール・リクール、マリー＝ロール・ライアン、野家啓一の業績をたどり、彼らがジェラルド・ジュネットらの構造論的物語論を批判的に継承しつつそれを補う視点をいかに提示しているかを検証する。

ホワイトは年表と年代記と歴史という三種の歴史表現を比較した。年表と年代記は出来事の時間順の記述しかなく、事件について完全な物語性を得ることができない。これにたいして歴史記述は、物語という形式によって過去の出来事が再構成されることによって、「理解の一形式」たりえているという。

リクールは物語的統合形象化（出来事が筋立てという操作によって、初めと終わりのある物語へと変換される段階）こそが「物語的理解」を保証するものであるとした。そのうえで、個人のアイデンティティすら、そのライフストーリーを物語ることによってしか保障されないと断言している。

ライアンに従えば、物語はひとつの解釈構造である。読者が物語を理解するためには、そのなかで起った出来事を理解するだけでなく、登場人物の動機や目標とする状態や避けようとする事態といった、物語中で必ずしも実現しない仮想的要素を勘案しなければならない。

野家啓一は、記憶によって洗い出された諸々の出来事を一定の文脈に再配置し、さらに時間系列に従って再配列することで、ようやく「世界」や「歴史」について語るができる、と指摘する。この意味で、物語とは世界を理解するための思考の枠組みであり、神話も科学理論も物語であるという。

これらの考えから敷衍すれば、物語理論もまた、物語についての物語となる。物語研究は物語についての唯一の真理を希求するものではなく、物語に関する、より操作性の高いモデルを求めることによって、物語のありようを共有可能な「経験」にする試みなのである。(北村直子)

## 2. 「19世紀オリエンタリズム文学——テオフィル・ゴーチエ」

フランスのロマン主義を代表する作家テオフィル・ゴーチエは、詩・小説・文芸評論・バレエ評論・サロン評など広い活動領域をもっていた。ペルシアやオリエントに対する彼の関心は深く、なかでもエジプトについては膨大な文献を読破し、オリエント絵画や写真にふれて、早くから作品の題材として重要な役割を与えていた。本論ではエジプトを主題にしたゴーチエ作品の靈感源を通覧し、それらがどのように虚構作品として結実していったかを見てみる。

ゴーチエのエジプトものとして、「クレオパトラの一夜」(1838)「ミイラの足」(1840)「ミイラ物語」(1858)がまずあげられる。これらの源泉は、大別して4つに分かれる。ヘロドトス、プルタルコス、プリニウスなど古典古代の作家の記述、同時代の、とりわけナポレオンのエジプト遠征を契機にして作成された報告書類(ドゥノン、シャンポリオン)、そして「ミイラ物語」に関してはエジプト考古学者エルネスト・フェイドーとの交友や先に東方紀行をおこなったネルヴァル、フローベール、マクシム・デュ・カンからの情報(とくにデュ・カンの写真集)、それからオリエンタリストと呼ばれる画家たちの絵画作品(グロ、ジロデ、ドゥカン、マリラ、ジェロームなど)。

ゴーチエの物語手法は絵画的、説明的であり、堅固な資料調査に基づいているが、筋書はむしろ単純で、革新性に欠ける。だがこのような一面はフローベールをはじめ歴史小説のジャンルを確立するのに貢献した。

(吉田 城)

## 3. 「オリエントを見る眼差しーヴィヴァン・ドノン『ナポレオン麾下の上下エジプト紀行』」

ナポレオン・ボナパルトを総司令官としておこなわれたエジプト遠征に、スケッチ画家として同行した人物、それがドノンだった。彼の紀行文には、ボナパルトを主役とする英雄譚と、近代帝国主義の根幹イデオロギーである「文明化の使命」論、さらに、フランス対オリエントという優劣の二項対立を強調する逸話が大量に書き込まれている。

しかしその一方で、二項対立がかき消える、そんな逸話もわずかながら挿入されている。フランス軍に起因する戦禍に言及するだけでなく、「文明化の使命」を掲げてエジプトを占領するフランス軍の行動にドノンは懐疑心を募らしさえているのだ。さらにドノンは、ムスリムの集団を残忍、狂信、懶惰、吝嗇などこき下ろす一方で、それとは対照的な表現でムスリム個人を賞賛する場合もあった。

紀行文の公刊後、ドノンは美術行政職のトップに抜擢され、国家買い上げのエジプト遠征画の制作に関与していく。そしてこのような絵画では、英雄としてナポレオンが賛美されただけでなく、フランス対オリエントという二項対立が強調された。政権内の要職に就いたドノンは、遠征の戦禍や、残忍でも懶惰でも吝嗇でもないムスリムの存在を、きれいさっぱり忘れてしまったかのようなようだった。

ドノンの紀行文はこの200年間、遠征に関するさまざまな作品にとって、基本文献の役割を果たしてきた。だが、その読まれ方はたいへん偏ったものだった。ナポレオンを英雄として描いたり、「文明化の使命」に貢献したものとして遠征を賛美したり、フランス対オリエントという二項対立を強調した、そのようなテキストとしてのみ読まれ続けてきたのである。

ところが、脱植民地化が本格的に始まる1970年代を境にして、ドノンの紀行文には別の顔もある、と気づかれるようになる。戦禍を嘆くドノンの姿が紀行文のなかで発見され、さらに、反植民地主義者としてのドノンが強調されるようになった。

流行のオリエンタリズム論に依拠し、18世紀から現代にいたるまでフランスがオリエントに注ぎ続けている眼差しの不当性を指摘することはたやすい。しかしそれだけでは、社会の現に存する変化に棹さすことにはならないのではないか。ドノンを「オリエンタリスト」と批判するだけでなく、エジプト滞在中のドノンが優劣の二項対立から一瞬でも免れえたのはなぜか、を問うことが重要なのではないだろうか。おそらくその答えは、エジプト社会との接触を通じる心性の変容ということにつきるだろう。そして、このような接触が継続されてこそ変容がいっそう確かなものになることも、エジプトから帰国して後のドノンの軌跡からうかがえる。植民地支配という不幸な形であっても、異文化との接触は、優劣の二項対立を揺るがしうる機会なのだ。植民地支配体制が政治的には崩壊した21世紀の現在なら、この機会は200年前よりもはるかに実り多いものとなるに違いない。ドノンは、遠征中は教師として、そしてナポレオン政権の要職就任後は反面教師として、この機会の価値を教えてくれる人物である。 (杉本 淑彦)

### 研究会の報告

「テキスト輪読: Aleksandr Pushkin. *Eugene Onegin*. Translated from the Russian, with a Commentary, by Vladimir Nabokov, Princeton University Press, 1975.」範囲: 第3歌第36連から第4歌第31連まで(pp. 402-444)

今回の発表箇所に関しては担当者の準備不足により、参加者の皆様にはご迷惑をかけた。この場を借りて研究会では論証や考察や調査が不十分だったいくつかの点について補ってみたい。

第3歌第38連 “томный взор” の訳語として “her dolorous gaze” が当てられている点。研究会の席では私はロシア語で “томный” が比較的一般的な形容詞であることに対し、英語 “dolorous” がそうではないこと、また “dolorous gaze” という語の連結が明らかにロリータ「ドロレス・ヘイズ “Dolores Haze”」への連想を誘うこと、タチヤーナがロリータのモデルの一人であることは多くの論者によって支持されていること、そしてロシア語では “h” は “g” で転字されるため “Haze” は “Gaze” となること（ロシア語版『ロリータ』ではロリータの姓は「ゲイズ “Гейз”」）などを挙げて、その訳語をナボコフが本来の忠実な翻訳者という自らに課した役割から逸脱し、自分の作品へのアリュージョンをロシア文学の古典に埋め込むための恣意的な選択であると述べた。

ここで問題となるのが “томный” という語の訳され方である。一般的な文脈ではこの語と “dolorous” がエクイヴァレントとは言えないことは確かであると思うが、それがこのナボコフが翻訳した *EO* というテキスト上においてもそうなのかということについては研究会の席では担当者の準備不足のため疎かになっていた。そこで、ロシア語の *EO* 原文で “томный” という形容詞が何回使われているのかをコンコーダンス等を用いて調べてみると、変化形・単語尾形として使われている例などをあわせて全部で13箇所出てくることがわかる。そのそれぞれにナボコフがいかなる訳語を当てているのかを調べてみると、以下のようになる。

第1歌第10連 “languorously” / 第3歌第20連 “dark” / 第3歌第30連 “languorously” / 第4歌第17連 “dolent” / 第5歌第31連 “dolent” / 第5歌第34連 “dolorous” / 第6歌第32連 “languid” / 第7歌第2連 “dark” / 第7歌第19連 “dolent” / 第7歌第48連 “languid” / 第8歌第28連 “languorous” / 旅の断章（第28連） “languorous”

この調査結果によれば “languorous”、及び “languorously” が5箇所ともっとも多く、“dolent”が3箇所、“dark”・“dolorous”が2箇所それぞれに続く。この訳語の中で “languorous”・“languorously”・“dark” は比

較的一般的な選択といっても通りそうだが、“dolent” はかなり聞きなれない語で明らかにそうではない。また注目すべきは第5歌第34連でも“dolorous”という訳語が“dolorous air”として使われている点である。この結果だけ見れば、“dolorous gaze”が本当に「ドロレス・ヘイズ “Dolores Haze”」なのかはやや再考の猶予が必要なようである。

ところでこうした作業はナボコフの翻訳の妥当性を検証する上で必要であるが、作品全体に対してそのようなことを行った例が奇妙な辞書『「ロリータ」英露辞典』である (Nakhimovsky, A. and S. Paperno., comp. *An English-Russian Dictionary of Nabokov's Lolita*. Ann Arbor, Michigan: Ardis, 1982.)。これは英語版『ロリータ』に出てくる英語で、ロシア語版『ロリータ』においてナボコフが通常の英露辞典・露英辞典にはないような訳し方・使い方をした単語を 7000 (!) あまりをエントリーした辞典であり、ナボコフの翻訳の癖を知る上で有用な資料である。EOやその他のナボコフの翻訳作品にもこのような辞書がつくられてもいいが、もっと望ましいのはテキストの電子化とコーパス言語学を応用した英露テキストの比較・検討作業であろう。ナボコフの作品理解だけでなく、言語学・翻訳論・比較文学など多ジャンルの研究に大きく寄与しそうなこのテーマは今のところほぼ手付かずである。

話が脱線したが、逆に言えば 13 回使用されている“томный”の訳語として“dolorous”が二回しか使われてはいないこと、“dolorous”という言葉が“Dolores”極めて直接的に結びつくことや“gaze”が『ロリータ』の作品の中でも重要なテーマとなること、そして最初に述べた理由などを考え合わせると自分の直感を支持してみたい気になる。

ナボコフが個人的な偏好で訳語を選んでいる例としては、今回の担当箇所では他にも第4歌第7連「猿“обязана”」が「クモザル“sapajous”」になっている箇所が挙げられる。ナボコフはその理由として1822年にL・S・プーシキンがキシニョーフからペテルブルグに出したフランス語の手紙をあげているが、エドマンド・ウィルソンも指摘しているように (Edmund Wilson. “In Strange Case of Pushkin and Nabokov”, *A Window of Russia*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1972. p. 211.)、ただの「猿」が「クモザル」になってしまうのはやはり承服しがたいと言わざるを得ない。これは注釈の説明以上に、ナボコフの小説を読むときの癖がそのまま反映された訳語の選定と言えよう。ナボコフがカフカの『変身』講義でグレゴール・ザムザが変身した虫の種類を今まで言われていたようなゴキブリではなく、甲虫であると特定したのは有名である。ここにはケンブリッジで動物学を学び、鱗翅類の専門家であったナボコフの猿なんて猿はいない(例えそれが比喩表現でも)という信念が読み取れるだろう。またナボコフは自作の翻訳においても以前書いた動物の種類を、後に訳すときにより詳しく特定するということをしばしば行う。例えばロリータの翻訳では「猿“ape”」が「キツネザル“макака”」になるという「変身」がおこっている。

今回の担当箇所、圧巻なのはなんとと言っても第4歌第19連4-6行目に付けられた注釈だろう。この8ページにわたる長い長い注釈の中で、ナボコフは「屋根裏」という一語の分析に始まってプーシキンが南方に蟄居を命じられた経緯、誹謗中傷の張本人「ほら吹き」フォードル・トルストイ、さらにはプーシキンの手紙の分析、デカブリスト詩人ルイレーエフとプーシキンがバトヴォで決闘を行ったという仮説、そして最終的にはナボコフ自身がバトヴォで従兄弟の一人と決闘ごっこをして遊んだ記憶へと自在に解説を展開している。

ここで問題となるのは、やはり注釈の後半部分の「ルイレーエフとプーシキンがバトヴォで決闘をした」という仮説だが、それを真に受けることはできないだろう。例えば『プーシキン事典』などといった定本的なものを紐解いてみても、「ルイレーエフとプーシキンが決闘したという説があるが情報が無い」とだけ書かれているだけである。またその論理の流れを追っていっても、客観的に見て状況証拠(とも呼べない物)

の積み重ねによる推論でしかないと言わざるを得ないだろう。しかし、その過程はナボコフ一流の時間移動・空間移動の手さばきであり、あたかも『青白い炎』でキンボートがシェイドにしたことのようなのである。こうした誠実な翻訳・注釈者からの逸脱が本書を貫く影のテーマとなっていると言えよう。

ここはやはりドリーニンが指摘したように (Dolinin, Alexander. “Eugene Onegin” *Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Ed. Alexandrov, Vladimir E. New York: Garland, 1995. pp. 126-27.) 『オネーギン』に対する注釈が、いつのまにかナボコフ自身の人生に対する注釈へのすり替えが行われていると見るのが妥当だろう。というのは、この注釈書よりも前に刊行された二冊の自伝の中でも (*Conclusive Evidence: A Memoir* 『確証』 (1951)、*Другие берега* 『向こう岸』 (1954))、バトヴォで従兄弟と決闘ごっこをした思い出はそれぞれ第十章の中心的なテーマになっていたからである。

さらにナボコフにとってバトヴォの思い出を *EO* の中で述べるのが大事だったのは、オネーギンが伯父から財産を相続したように、この地所を自分も伯父から相続したという個人的な事実があったからだろう。そしてナボコフが *EO* と自分との間のこの個人的な、伝記的な関係を読み取っていたとするならば、第一歌第一連につけた注釈の中 (pp. 31-33) で、オネーギンの伯父に対してナボコフがなぜあんなに辛辣だったのかの謎も解けよう。というのも自分の死の間際まで相続人の指定を引き伸ばしたオネーギンの伯父に対して、ルカおじさんはナボコフが 15 回目の命名日を迎えた日に、早くも自分を相続人にすると言ったのであったから (自伝のそれぞれ三章参照)。

また、この箇所は時間に関する問題が表面化している箇所でもある。今までは主に『オネーギン』内部の時間の流れに対してそれが「現実的」かどうか分析を加えてきたナボコフだが、ここではそれはプーシキンの「現実」の人生の時間に関する議論になっている。ナボコフは自分 (の家族) の個人的な伝説を「現実」にするためプーシキンとルイレーエフをバトヴォで闘わせようと、ありとあらゆる推論を尽くす。ここでナボコフが持ち出すのはキシニョーフ時代のプーシキンの日記の記述である。その日記の中でプーシキンは「自分が追放されてからちょうど一年が経過した」と書いているのだが、その日記が書かれた日付 (1821年5月9日) はプーシキンが実際に街を去った日付 (1820年5月6日) と三日間のタイムラグがある。ナボコフはプーシキンが彼同様「日付」にうるさかったということを論拠に、その三日間にプーシキンがペテルブルグ近郊に留まって、自分を中傷した詩人ルイレーエフと当時その実家があったバトヴォで密かに決闘を行ったという仮説を組み上げてみせる。

ここでただちに思い浮かぶのが『ロリータ』における「修正主義」論争である。すなわち、修正主義者たちはハンバートが提示した手記の執筆期間から推定される死亡日と、ジョン・レイ・ジュニアが執筆した序文におけるハンバートが死亡した日付の間の「三日間」のタイムラグを問題視したのであった。その「三日間」にはたしてハンバートはクイルティと決闘をしたのかどうか？ ハンバートが自分の運命の日付にやましかったことを思えばあるいは……。いずれにせよ、この時間に関する注釈が *EO* の中でも非常に面白い箇所であることは間違いない。

そして、この注釈書の出版後の 1966 年に刊行された *Speak, Memory: An Autobiography Revisited* 『記憶よ、語れ：自伝的再訪』の第十章では “[...] we had been holding up by gentlemanly distance in a green avenue where a duel was rumored to have been many dim years ago” という前の二冊の自伝にはなかった書き加えられた一節がある。ナボコフが *EO* 作業において創り出したこの「現実」は、最終的に自身の実人生への注釈書と呼ぶべき書物に組み込まれたのであった。 (秋草俊一郎)

## ヴラジーミル・ナボコフとドイツ文学

鈴木 聡

ヴラジーミル・ナボコフは、アレクサンドル・プーシキンの韻文長篇小説『エヴゲーニイ・オネーギン』(1831)の翻訳に付した註釈(1964、75)において、ヨーロッパ文学における女性の足の讚美という伝統を論じている。その議論の過程で、彼は、ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの長篇小説『親和力』(1809)第1部第11章の一節を原文で引用した。その箇所では登場人物のひとりが、ある貴婦人の可憐な足に備わる天賦の魅力について熱っぽく述懐しているのである。

論証の当否はさておき、この註釈を読むさいにやや奇妙な違和感が生じてくるのは、初期の長篇小説『キング、クィーンそしてジャック』(1928)の英語版序文(1967)のなかでナボコフが、自分はドイツ語を話すことができず、「原文でも翻訳でもドイツ語の小説を一篇たりとも読んだことがない」と言明している事実が思い起こされるからにほかならない。とはいうものの、ドイツでの亡命生活が十数年におよんだ事実を念頭におくならば、彼がドイツ語ならびにドイツ文学についてまったくなんの知識ももたなかったと想定することのほうが、むしろ不自然きわまりないようにも感じられるのだ。

ナボコフとドイツ文学との婉曲な結びつきにかんしていえば、最近多方面で論議のまとなったのは、長篇小説『ロリータ』(1955、58)ときわめて似かよった、今日ではほぼ完全に忘れ去られたドイツ語小説が存在するという指摘であった。すなわち、ハインツ・フォン・リヒベルク(本名ハインツ・フォン・エシュヴェーゲ、1891-1951)の短篇小説「ロリータ」(1916)がその原型として擬せられる可能性があるというのである。ドイツの批評家ミヒャエル・マールによって提唱されたこの説は、一連の論争を招き、一部ではナボコフによる剽窃の可能性までもが取り沙汰されるほど、スキャンダラスな受けとめられかたをすることとなった。

しかしながら、このような指摘自体がある種の既読感を呼び醒ますものであったことも否定し得ない。というのも、D・バートン・ジョンソンが、1985年に発表した著書(*Worlds in Regression: Some Novels of Vladimir Nabokov*)のなかで、あるドイツ人作家の筆になる通俗小説とナボコフ後期の代表作との類似性をすでに指摘していたからである。1931年執筆の短篇小説「再会」のなかでも言及されていた、レーオンハルト・フランク



(1882-1961) の長篇小説『兄と妹』(1929) を、『アーダ』(1969) の着想の源泉として想定することは、「原ロリータ」と『ロリータ』の影響関係という仮説以上に) きわめて有力な推測であったといつてまちがいなからう。

このフランクの作品は、描かれた状況が酷似している点からいって、『アーダ』との関連をどうてい看過し得ないと思われるにもかかわらず、その後、ジョンソンの主張がセンセーショナルな話題の中心となったなどは考えにくい。それにたいして、今回のマールの「発見」が異様なまでに注目を集めたことは、『ロリータ』なる作品が、その実質的内容や真摯な解釈を離れて、いわばカルト的な名声を獲得するにいたっているという、作者自身にとつても、かつてのナボコフ研究者の多くにとつても、まったく予想外の文化状況を皮肉にも証し立てていたといえるかもしれない。

上述の著書においてジョンソンは、近親相姦のモチーフが、バイロン、シャトーブリアンなどの系譜に由来するものであることを解き明かした。しかし、おそらくはナボコフのテキスト自体において言及されていないという理由により触れられることがなかったものの、ゲーテの長篇小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1796) なども考察の範囲に加えられてよいはずである。そこで語られた豎琴弾きの秘められた過去にかかわる挿話が、わが国における近親相姦文学の代表例のうちに数えられるべき、横溝正史の『悪魔が来りて笛を吹く』(1954) において重要な伏線の一端をなしていたことも同様に記憶にとどめられてよいだろう。

さまざまな文学的伝統を縦断ないし横断する、主題の変奏の広汎な伝播と並行する形で、作者自身が否定し、あるいはごく消極的な評価しか与えていない事象とのひそかなつながり (たとえばナボコフの場合でいえば、本人が頑強に認めようとしなかった、ジェイムズ・ジョイスから受けたなんらかの種類の感化) を改めて検討してみようとする試みは、ナボコフ研究というような特定の領域に限定されることなく、今後における人文学全般の展開にとって必要不可欠なものとなってくるのではないだろうか。

お知らせ

◆ 第一研究班が、以下の要領で、第 12 回研究会を開きます。

日 時： 2004 年 11 月 6 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 213 号室

報 告： 若島 正（京都大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 4 歌第 32 連から第 51 連まで」

コメンテーター：秋草俊一郎（東京大学大学院）

後記：ニューズレター *TRANS* の 11 号をお届けいたします。国際フォーラムとふたつの研究会の報告で、充実した号となりました。秋の学会シーズンを迎え、外部の学会への参加や他の研究グループとの交流により、ますます研究内容が豊かになるものと期待されます。より多くの皆様の、活動への参加をお待ちしております。（河井）

研究会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

英米文学研究室（担当：河井）

tel./fax: 075-753-2828

e-mail: [trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp)

web page: <http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/>